

Kawasaki 美術館  
金山平三の世界



《一番桜》 1954 (昭和29)年 40.7×53.0cm 油彩・布 兵庫県立美術館蔵

## 十和田の花曇りの下、 激しく華やかな桜の木

一九七六年(昭和五十一年)に日動出版より刊行された浩瀨(こうせ)な『金山平三画集』は、今もなお金山研究における第一級の基礎資料として重要であるが、その末尾に編集された年譜によると、この作品は一九五四年(昭和二十九年)四月から翌月にかけて、十和田に滞在中描かれたものだという。ちなみに金山は、本作を完成させる前にらくらく夫(らくらく)人(ひと)にあてた書簡の中で、この年は雪も少ない割に肌寒い気候が続き、絵になる情景に乏しいと綴っている。

ここではおそらく十和田湖畔とおぼしき水面を望む情景と、その前に立つ桜の木が描かれている。遠くの山の稜線を逆さまに映し出すほどにおだやかな水面のようすが、入念な筆致で表現されている。一方、画面の大半を占める空は、曇天の様相を呈するようなやや鈍い灰褐色で示されている。空と水面の平靜な描写を背景に、金山の後半生に特に顕著な、激しさすら感じさせる筆致で表現された桜の木は、華やかな色彩を身にまとい、北国の長い冬を越して春に花開くたくましい生命力を、喜びを持ってわれわれに伝えているかのようである。

(兵庫県立美術館学芸員  
相良周作)



### 金山平三と川崎重工

金山平三画伯は、1883年(明治16年)神戸に生まれ、1964年(昭和39年)80歳で生涯を終えました。1909年(明治42年)東京美術学校(現在の東京芸術大学)を首席で卒業した後、欧州各地で制作を重ね、1916年(大正5年)には、第10回文展に出品した作品が特選第二席になりました。生涯にわたって旺盛な創作活動を続け、自然風土を相手に多くの名画を残し、その業績は近代洋画史上に燦然と輝いています。

川崎重工は第11回文展に出品された「造船所」が縁となり、その後、交流を深めました。画伯の晩年には、自選作品138点の永久保管の依頼を受け、その作品を預かるほどでした。後になり川崎重工は、一部の作品を残して、兵庫県立近代美術館(現・兵庫県立美術館)にすべて寄贈しました。